
ネズの木、魔女

華担 弦

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ネズの木、魔女

【コード】

N0859C

【作者名】

華担 弦

【あらすじ】

童話「ネズの木」を基にした、小さなマリアのお話。

(前書き)

このお話は、グリム童話「ネズの木」を基にしたお話です。

ネズの木、魔女

「ねえ、おかあさん。おかあさんはどうしてお兄ちゃんがきらいなの？」

わたしがそうきくと、いつもおかあさんはこう答えた。

「お兄ちゃんがきらいなわけではないわ。ただ、お兄ちゃんのホントのお母さんは私じゃなくて、怖い魔女だったの。だから私は、いつも用心しているだけよ」

そう言つとお母さんは、にわの小さな木をゆびさす。

「お兄ちゃんのホントのお母さんはあの杜松ネズの木の下にいるのよ。悪い魔女だから、木の下に埋められてるの」

おかあさんはわたしのかみをなでてくれる。

「だからね、マリア。お兄ちゃんと遊んじゃ、だめよ？」

うん、とうなずくと、えらいわ、とほめてくれる。

「おかあさんは、マリアのこと、好き？」

「ええもちろん。お兄ちゃんなんかより、ずっと。だって、自慢の娘ですもの」

おかあさんはすぐに答えてくれた。

そうか、おかあさんはお兄ちゃんより、わたしのほうが好きなんだ。

だけどね、おかあさん。

どうしておかあさんは、わたしの目をみないの？

どうしてお兄ちゃんばかり見るの？

いつも、おかあさんはわたしをほめるより、お兄ちゃんをおこしている。

いつも、おかあさんはお兄ちゃんのわるくちで、わたしのお話、ほとんどしない。

ねえおかあさん。ほんとうに、わたしのこと、すき？

学校がおわって、お友だちといっぱいあそんでから、おうちにかえる。

おうちにかえったら、なにしてあそぼう？

おかあさんはあそんじゃダメ、って言ってたけど、今日もお兄ちゃんにあそぼう。

お兄ちゃんは、わたしのことを見てくれるから。

お父さんはいつも帰りがおそくてあそんでくれない。

わたしを見てくれるのはお兄ちゃんだけだから。

だから、おかあさんがおこったら、わたしがあやまるの。お兄ち

やんに「あそぼうよ」っていうのは、いつもわたしだから。お兄ち

やんは、わるくないんだ。

「ただいま！」

ドアをあけると、おかあさんはいそがしそうにおしごとをしていた。

「おかあさん、お兄ちゃんはどこ？」

おかあさんはいそがしそうにしている、ふりむいてくれなかったけど、やさしそうに答えてくれた。

「物置におやつのリンゴを取りにいっているわ。あなたもお兄ちゃんにリンゴ、もらってらっしゃい」

「はい！」

ものおきに行くと、なんだか鉄みたいなおいがした。

へやのまんなか、お兄ちゃんはイスにすわってリンゴをもって
いた。

「お兄ちゃん、マリアにも、リンゴちょうだい」

お兄ちゃんはじつとすわったまま、うごかない。

「お兄ちゃん？」

いつも、わたしがよんだらへんじをしてくれるのに。

さびしそうな目で、だけど、えがおでわたしを見してくれるのに。

「おかあさん、お兄ちゃんがへんじをしてくれないの」

おかあさんのところにもどると、おかあさんはやっぱりそがし
そうにしていた。

「どうしたら、いい？」

おかあさんはふりむかなかったけど、こう答えた。

「そうなの、お兄ちゃんも困った子ね。もう一度呼んで返事がな
かったら、お兄ちゃんのほっぺを叩いてみなさい」

「うん、わかった」

ものおきにもどって、お兄ちゃんをよぶ。やっぱり、へんじがな
い。おかあさんはたたいてって言ったけど、きつといたいから。わ
たしはお兄ちゃんのほっぺを、そとつついた。

「ごん、と音をたてて、お兄ちゃんのあたまが落ちた。

「……お兄ちゃん？」

「あらあら大変。何をやっているの MARIA」

いつの間にか、おかあさんが後ろに立っていた。

「お兄ちゃんが死んじゃったじゃない。お父さんにばれたら怒られるわよ」

お兄ちゃんが、しんじやった？

「そうだわ。お父さんにはれないように、お兄ちゃんをスープに
てしましましょう」

お兄ちゃんを、スープに？

「MARIAがお兄ちゃんを殺してしまったこと、お父さんには秘密に
しておくわ」

わたしが、お兄ちゃんを、ころした？

わたしが？ どうして？

わたしはお兄ちゃんにきいたけど、お兄ちゃんは、やっぱり答え
てくれなかった。

「よいしょ」

おかあさんはお兄ちゃんをだいどころにはこんで、ほづちょうでばらばらにした。

よこで、おゆがぐらぐらにえていた。

「おいしいスープになーれ、おいしいスープになーれ」

おかあさんは、ばらばらのお兄ちゃんをスープにいれてかきまわす。

わたしは、ずっとそれを見ていた。

夜になって、おとうさんがかえってきた。

「ただいま。おや、いい匂いがするなあ」

「お帰りなさい。今日はいいお肉が入ったのでスープにしたわ」
おかあさんはわらいながらスープをおさらにわけた。

「おお、うまそうだなあ」

そう言って、おとうさんはスープを食べた。

「うん。とてもやわらかくて美味しい。いい肉だなあ」

おとうさんは、どんどんスープを食べた。

なんかいもおかわりをして、すっかりおナベがからっぽになったころ、おとうさんは言った。

「そつえば、息子はどこにいったんだい？」

「親せきの家に泊まりに行ったわ」

おかあさんが答えた。

「そうか。それで、マリアはなぜ泣いているんだい？」

「学校で、友達と喧嘩をしたんですって」

そう、わたしはずっとなっていた。

おかあさんがお兄ちゃんをばらばらにしていたときから。

すごくかなしくて、なっていた。

お兄ちゃんがしんじやった。

お兄ちゃんが、スープになってしまった。

スープになって、おとうさんに食べられてしまった。

もう、お兄ちゃんはいない。

もう、よんでも答えてくれない。

もう、なでてくれることはない。

もう、ずっと会えない。

もう、わたしを見てくれない。

もう、わたしをだれも見えてくれない。

だれも、わたしを見てくれない。

見てくれたのはお兄ちゃんだけだった。

だれも、わたしを見てくれない。

もうだれも、わたしを。

みて、くれない。

それは、イヤだった。

わたしはなくのをやめた。

あたりは、まっくらだった。

おとうさんもおかあさんも、もうねている。

わたしは、タンスのいちばん下からぬを出した。

すべすべして、とつてもきれいなもようがある。

そして、つくえの下にすててある、お兄ちゃんのほねをひろった。

おかあさんがばらばらにしたので、ぜんぶひろうのはたいへんだ
った。

お兄ちゃんのほねをぬのにくるんで、にわに出た。

月が、とつてもきれいだっただ。

わたしは、いつもおかあさんがゆびをさしていた、ちいさな木のところにあるいていった。

おかあさんは言っていた。お兄ちゃんのおかあさんは、まじよだっただ。

わたしは、しっている。友だちから、きいたことがある。

まじよは、しんだ人をいきかえらせることができるんだよっだ。

まじよなら、しんだ人を、いきかえらせられる。

お兄ちゃんのホントのおかあさんなら、お兄ちゃんをいきかえらせられる。

お兄ちゃんに、また見てもらえる。

わたしがここにいるっだ、見てもらえる。

ちいさな木の下をほっだ、ほねをつつんだぬのをうめだ。

木が、さわさわと、ゆれだ。

わたしは、たいせつなことをおもいだだした。

「そっだ。まほうのよういをしなきゃ」

お兄ちゃんのおかあさんはじめんの下だ。だからきつと、まほうのことばを言えないし、まほうのもようをかくこともできない。

わたしは木のまわりにまほうのもようをかいた。

そして、まほうのことばを言っだ。

ばりん、と大きな音がして、木がはんぶん、われだ。

われだ木からけむりが出て、中から鳥さんが出てきた。

ばたばたと空をとんで、鳥さんはうたった。

「母さんが僕を殺して、父さんが僕を食べた。

妹のマリアが、僕の骨を拾って、絹の布に包んで、杜松ネズの木の下に埋めた。

ピーチク、ピーチク！

僕はなんて素敵な小鳥！

やった！ これでお兄ちゃんがいきかえる。

わたしはすっかりうれしくなって、鳥さんにおねがいした。

「きれいな鳥さん、おねがいをきいて！」

「ピーチク！」

鳥さんは空のとおくとんでいった。

すっかりあんしんしたわたしは、おうちにもどった。

何日かたったある日。

まだお昼なのに、おとうさんがかえってきた。

おとうさんとおかあさんがはなしをしている。

どうやら、おとうさんのおしごとがなくなったらしい。

おかあさんも、おとうさんも、すっかり元気がなくなった。

だけど、わたしはへいき。

もうすぐ、お兄ちゃんがかえってくるもの。

お外から、うたがきこえた。

「母さんが僕を殺して、父さんが僕を食べた。

妹のマリアが、僕の骨を拾って、絹の布に包んで、杜松ネズの木の下

に埋めた。

ピーチク、ピーチク！

僕はなんて素敵なお鳥！」

鳥さんが、もどってきた。

おかあさんは、うたをきいてびっくりしていた。

「何？ この不吉な歌は」

「そうかい？ とても綺麗な声じゃないか」

おとうさんがそう言つと、おかあさんはおこつて言った。

「そんな！ とても恐ろしい歌じゃないの！ マリア、絶対お外に出ちゃダメよ」

「だけど、わたしはおかあさんの言うことをきかないで、そとに出た。」

もうすぐ、お兄ちゃんがかえってくる。

鳥さんは、やねの上においた。

「おかえりなさい、鳥さん」

「ピーチク！」

鳥さんは、もっていたものをわたしの前におとした。

赤い、小さなクツ。

鳥さんは、まず、わたしにまっ赤なクツをくれた。

「母さんが僕を殺して、父さんが僕を食べた。

妹のマリアが、僕の骨を拾って、絹の布に包んで、ネズ杜松の木の下に埋めた。

ピーチク、ピーチク！

僕はなんて素敵なお鳥！」

おうちにもどつて、おとうさんにクツを見せた。

「こんどはおとうさんがそとにでた。

鳥さんはおとうさんに金のくさりをくれた。

「母さんが僕を殺して、父さんが僕を食べた。

妹のマリアが、僕の骨を拾って、絹の布に包んで、杜松ネズの木の下に埋めた。

ピーチク、ピーチク！

僕はなんて素敵な小鳥！」

おとうさんが、うれしそうにもどってきた。

「あの鳥は親切だ。マリアには靴をくれたし、俺には金の鎖をくれたぞ。これで、働かなくても生きてゆける」

おかあさんは、青くなってふるえていてけど、おとうさんにこう言った。

「そう……じゃあ私も何か買しましょう。悪い気分が無くなるかもしれないわ」

おかあさんはそとに出た。

ずしん。

「母さんが僕を殺して、父さんが僕を食べた。

妹のマリアが、僕の骨を拾って、絹の布に包んで、杜松ネズの木の下に埋めた。

ピーチク、ピーチク！

僕はなんて素敵な小鳥！」

大きな音がきこえたから、わたしはおそとに出た。

おかあさんは、大きな石うすの下で、つぶれていた。

そうか、つぶれちゃったら、わるいきぶんじゃ、なくなるね。

鳥さんはおかあさんに石うつすをあげて、わるいきぶん、なくしてくれただ。

つぶれたおかあさんをみていると、おかあさんの上の石うつすが、にわの木みたいにはんぶんにわれて、けむりが出てきて、

中から、お兄ちゃんが出てきた。

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

その夜。

こんどはおかあさんがスープになった。

おとうさんは「おいしくない」と言っていた。

「なんだ、この肉。硬くてとてもまずいぞ」

「そのお肉しか、なかったの」

わたしは答えた。

ふうん、とおとうさんは言った。

「ところで、おかあさんはどこに行ったんだい？」

お兄ちゃんとわたしは、にっこりわらう。

「しんせきのおうちに、とまるんだって」

あれから、おかあさんはかえってこない。

でも、かなしくはなかった。

金のくさりをもらったおとうさんは、おしごとになくなった。

いまではおうちでたくさん、おしゃべりをする。

とても、まいにちがたのしい。

今日もまた、みんなでおしゃべりをする。

わたしはとてもしあわせ。

慣れた様子で窓を器用に開け、鳥が部屋に入ってくる。
あれからもう、ずいぶんと経った。

「ピーチク！」

私はその羽根をそっと撫でる。

長い年月の間に、すっかり使い魔として馴染んだ鳥。

「ピーチク！」

「そうだね」

私は部屋から出て階段を下りる。

暗い廊下の先に、扉が一つ。

扉の向こうには、お兄ちゃんがいる。

私と同じ、年を取らないお兄ちゃんが。
でも、お兄ちゃんには私が魔法をかけないと、すぐに腐り始めてしまう。

だから、また魔法をかけなおさないと。

そういえば、いつだっただろう？

最後に声を聞いたのは。

最後に私に笑いかけてくれたのは。

でも、私は平気。

私は小さな女の子のままだけど、もう平気なもの。

声が聞けなくても

笑いかけてくれなくても

お兄ちゃんさえいてくれれば。

私は一人じゃない。

お兄ちゃんは私を見てくれる。

私は、お兄ちゃんさえいればいい。

それがどんな形であっても。

「そうでしょう？　鳥さん」

「ピーチク！」

はじめて、鳥が運んできたもの。

『石臼』は罪の重さ。

だから、母は潰されて死んだ。

『金の鎖』は心の鎖。金でできた鎖は、とても弱い。

だから、父は鎖を売ったお金がなくなると、ほとんど家に帰ってこなくなった。

『赤い靴』は魔女の証。血色に染まった人生^{みち}の証。

だから、私は屍を数ていく。ずっと、ずっと。

それはきつと、神様に背いた罰。

ネズの木、魔女

だけどね

おとぎ話の最後は、「いつも」めでたしめでたし「」。

だから、わたしはしあわせ。

ずっつと、ずっつと

ネズの木の、魔女

「そっでしよう？」 お兄ちゃん
「ピーチク！」

(後書き)

グリム童話「ネズの木」のマリアの視点から、物語とその後を創ってみました。

ひらがなが多くて読み辛かったらごめんなさい。

よろしければ評価・感想をお願いします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0859c/>

ネズの木の、魔女

2008年11月7日06時47分発行